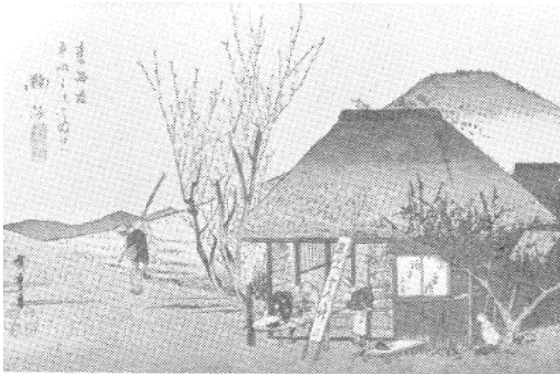


旧東海道五十三次の旅

梶山産婦人科医院 梶山 満

鞠子(21)

「梅わかな丸子の宿のとろろ汁」の句碑の建つ丁字屋は広重保永堂版の画の情緒そっくりの味を今も食べさせて呉れる。野趣あふれた黒い色に素朴な味と香気は忘れがたいもの。その前を流れる丸子川を越すと右に吐月峰が見える。山麓には連歌師宗長の住庵として知られた柴屋寺があり由緒ふかいこの草庵の庭は樹木泉石の布置、風流の極をあらわしている。



岡部(22)

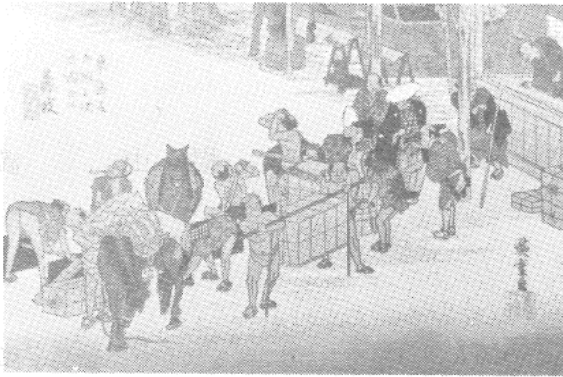
「西へゆく雨夜の月やあみだ笠、影を岡部の松に残して」と辞世をしるした笠をかたわらの松にかけて野辺の露と消えた西住、いく月か経って再びそこを通った師の西行法師は、この話を耳にして深い道理を教えたつもりがとんだ結果を招いたと涙を流したという岡部に残る師弟愛のエピソードを思い浮かべながら宇津谷峠に登る途中、松の根に古びた五輪の墓。これが西住の笠かけ松で、すでに雷火で枯れて今は二代目。それとまた黙阿彌の書いた座頭文彌が、小心も

の商人伊丹屋重兵衛に殺される「蔦紅葉宇都谷峠」というものすごい筋の芝居を想像するに十分な陰気な宇都の山をこえる。名物の十団子が今も縁日のときなどに作られているという。「十団子も小粒になりぬ秋の風」許六。



藤枝(23)

藤枝の細長い町の中の蓮生寺は、蓮生坊と名を変えた源氏の家来熊谷真実の伝説の地、境内いたる所熊谷の字がみえる。宿の西で瀬戸川を歩渡りでこすと瀬戸、二軒家、三軒家などの立場。この辺の立場はどこも「瀬戸の染飯」が名物で「その形は小判ほどにて、こわめしにくちなしを塗ったり。うすきものなり」と万治道中記にあり、強飯をくちなしの汁で黄色く染めて摺りつぶし、小判形にひねって薄くして干し乾かしたものと思えばよい。



島田(24)

越すにこそ大井川の難所ぶりは、川の水が増したばかりのせいでもなかった。「川会所」と呼ぶ番所があり、川を越す者はここに身元を名乗り不審があれば調べられた。元祿九年にできたものが今に残って保存されている。

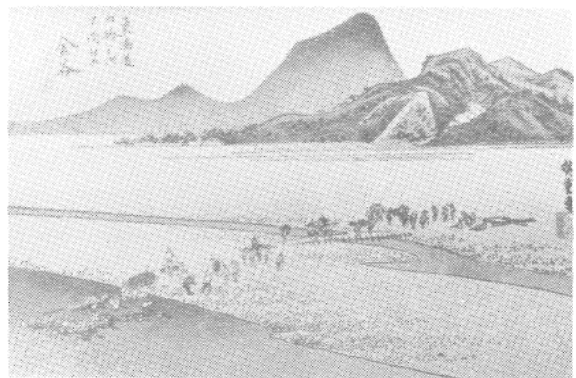
ここ島田の氏神である大井神社の奇祭「帯祭り」は三年に一度行われ、美しい宿場文化を伝えている。大名行列につづいて、沢山の大きな木刀に丸帯をかけてねり歩く。起源は元祿八年、それ以前は嫁入りした新妻を晴れ着のまま町中ひきまわす風習があった。女神である氏神に安産を祈願し新たに氏子になったことをふれるためであった。



金谷(25)

島田と対する金谷はやはり川越宿場として栄えた町だが、大井川の架橋で失職した川越人足たちが、今では牧之原大茶園をつくった。大井

川の川止めで生れた「朝顔日記」の朝顔の松を対岸に残して、菊川の立場を過ぎると、西行法師が詠じた「年たけてまた越ゆべしと思いきや命なりけり小夜の中山」である。広重の画にある夜泣石の由来は、昔臨月の女がこの峠で強盗に殺された。里人が死体の傍に泣いている赤ん坊を見付け、音八と名付けて育てたが、殺された女の霊がそばの石に乗移り、毎夜悲鳴をあげるのので里人は夜泣石と名付けた。のちに弘法大師が石に仏号を刻み、お経をあげたら泣き声が止んだが、音八はその後大和で刀とぎ師になり母の仇を討ったという。この石は明治九年路上のさまたげになると右脇の道傍へ移したが、その後新国道ができてからはそちに移したというが、実は久遠寺の境内にもう一つある。同寺境内の扇屋という茶店には音八を育てたという水飴や飴の餅を売っている。



日坂(26)

佐夜中山夜泣石から西へ進めば新茶屋、大松、佐夜新田、沓掛の立場を経て右折左折する急坂を下って国道1号線と合流した所が日坂の宿場。ここの日坂八幡宮の境内に藤堂高次侯(高虎の子)の参勤交替にまつわるエピソード「公孫樹の古木」がある。

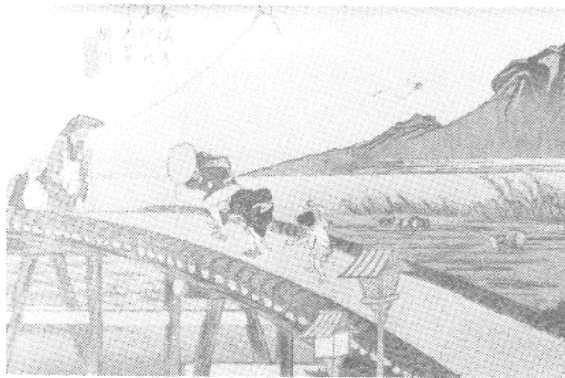
日坂の西はづれの塩井川は彌次喜多両人が川に落される始末になる。また広重が描いた保永堂版掛川の画はこの橋と推定される。



掛川 (27)

寛政十年、オランダの使節として来朝したケイスベルト・ヘンミイは江戸から長崎へ帰る途中、ここ掛川の中町の間屋場役人林喜太右衛門方に泊っていて病死し、仁藤町の天然寺に葬られ「この地下に静座のままの姿で埋没してある」とオランダ語で記されてある。又紺屋町の広楽寺には嘉永二年、中町のはたご捨金屋で病死した三代目尾上菊五郎の墓もある。

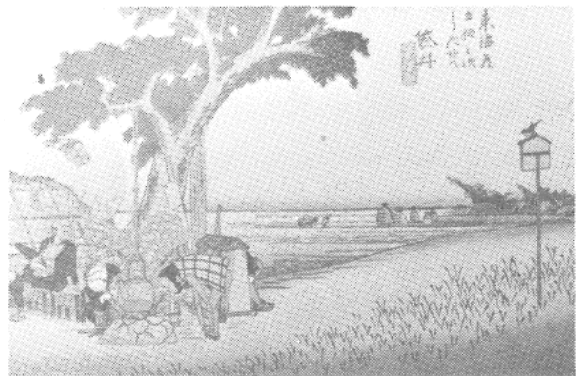
掛川の西はづれ逆川を渡って大池の立場から遠州森の石松でゆかりの森町を経て、火の神様で有名な秋葉山へ至る秋葉道の追分があり、広重も行書版と隸書版東海道の画に描いている。



袋井 (28)

袋井の可垂斎は曹洞宗のお寺であるが、ここに秋葉山三尺坊大権現がいっしょに祀られている。本当の秋葉山は先述の掛川の追分から十一

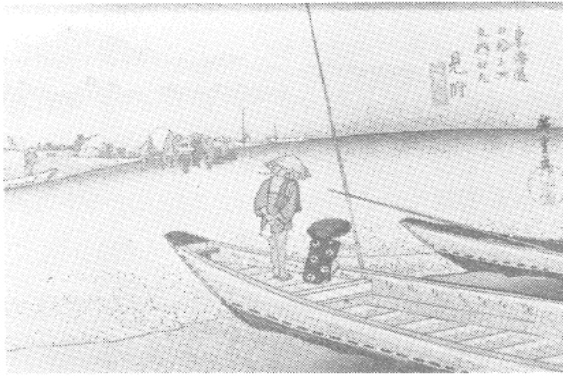
里。大登山秋葉寺という曹洞宗の寺で、御本体は三尺ばかりの観音像。天文の頃、武田信玄のために焼かれて観音堂だけが残った。それも焼いてしまおうと火をつけたが、棟上から白水が流れて焼くことが出来なかった。この事実から火防の神として参詣者が各地から集まってくる。広重沼津の画にある天狗の面を背負った巡礼も、おそらく秋葉山詣りであろう。その秋葉神社の参道で産声をあげた人がいる。遠州森の石松の故郷であるという。



見附 (29)

「京より下る人ここに初めて富士を見る故、見付と云へり」といわれる見附は今の磐田市。町はづれの三本松仕置き場には白浪五人男の筆頭「日本駄右衛門」(本名浜島庄兵衛)の首がさらされ、いまも供養塔がある。墓石は見附の見性寺のすみにある。

見附より天竜川に沿って北上したところ池田は古東海道の旧駅で、この長者の娘熊野のことは平家物語や源平盛衰記などに見え、謡曲にもつくられて有名であり、行興寺境内に天然記念物熊谷の長藤と、熊野親子の石塔があり、建久九年とあるのが熊野、建久元年と刻したのが母の墓という。



浜 松 (30)

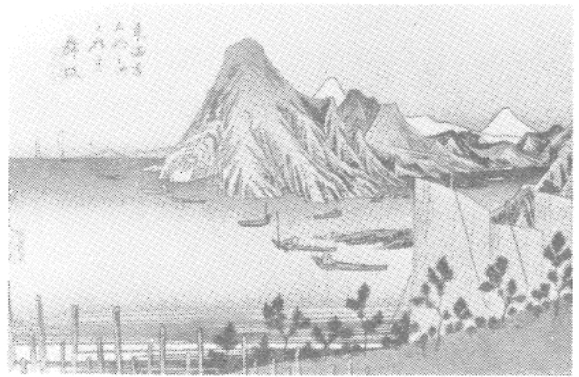
天竜川の渡船は川幅十町ばかり。中州があつて水流が二本に分かれている所から東を大天竜、西を小天竜といい、船渡しは常水四尺九寸までで、五尺になると川留になる。西岸上陸地にある中の町は江戸へも京へも六十二里二十八丁で、ちょうど東海道の真中の町なのでその名があるという。

浜松は昔は引馬といった。永祿十一年、家康が浜松城(その頃は曳馬城)を攻めにかかったところがこの城主が飯尾豊前守乗竜の後室で椿の方、つまり女城で、それも家康の烏帽子親である吉良の娘であるという。遂に同年末、城主の椿の方をはじめとして女十八人が戦死をとげたといわれる。(寄手の大将として家康はどんな心境であつたことか)



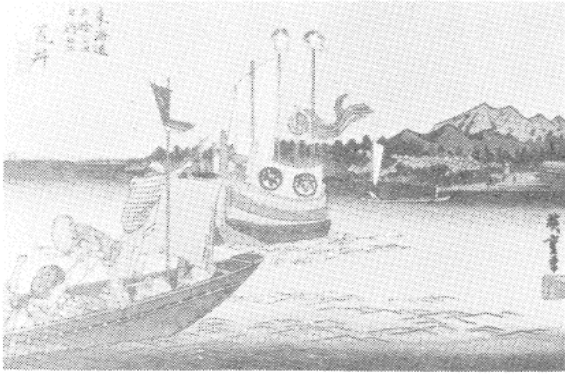
舞 坂 (31)

浜松の西、八町繩手から高塚の大池を左に見て篠原の立場、そしてこの舞坂まで昔は一面の松原であつた。舞坂から次の新居まで海上一里の舟渡し。これを「今切れの渡し」という。船賃は一艘につき上り百八十文、下り百四十文。上りが高いのは波の関係で漕ぎにくいいためという。一人いくらでなく、乗合い人数によって百八十文を割るから、その時の人数次第になる。但し尾張藩と紀州藩の者に限りこれは御三家の家格だから一艘百三十文に割引された。



新 居 (32)

今切れ渡し西側上陸点の新居は荒井ともかいて、箱根と並ぶ東海道の関所。いわゆる「入鉄砲に出女」といって女には手形を改め、関所抱えの改め婆がいて髪を解かせ、乳房までさぐって手形と違えばすぐ通行を停止させられた。関所建物の中には突く棒、さすまた、そでがらみなどのいかめしい捕物道具が保存されている。関所の門は暮六つで閉ざされるので、事実上それ以後の海道の人通りは絶えてしまったようである。



白須賀 (33)

海道は丘のふもとを縫って大倉戸、新町の立場につく。このあたりに昔、東海道第一の巨松といわれた白須賀の泣き松があつたといわれる。白須賀汐見坂には地藏堂があり、この坂から遠州七十五里を見渡す眺望は広重も道中記日記に「東海道中指折りの景色なり」と記しているように渚の松の緑、沖に漕ぐ漁舟、浪間にとぶ千鳥など美事で、それに富士山も見えるが、これが富士見の限界である。

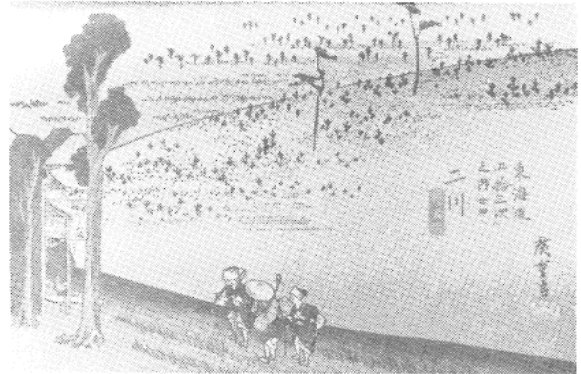


二 川 (34)

白須賀宿の西はづれ境川ここは遠州と三州の国境い、松並木の中に荒廃した一軒屋ありこれが一里山のお化茶屋、その少し先左側に一里塚あり前面に秋葉社と地藏堂がある。ぐるりが雑木で囲まれ但人これを化物塚といっている。このあたり松並木のほかは左右小松の生えた原山がつづくが、これが広重描く猿ヶ馬場で昔は柏餅の名物を売る茶店があつた。

二川の本陣馬場八平三氏宅は現在醬酒製造業を営み「本陣」の看板を掲げている。外観や内庭など江戸時代のまま。向側の旧はたご真砂屋も千本格子がはまり軒が深く昔のまま。

二川宿から次の吉田宿まで今も昔を偲ぶ飯村の松並木がよく保存されている。



吉 田 (35)

「吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振袖が」とうたわれた吉田(豊橋)の中心は札木町、本町あたり。ここの茶店「きく宗」の菜めし田楽は東海道味道中で一番といっても過言でない風情がある。広重描く豊川の橋は今は吉田大橋となっているが、吉田城のやぐら修理中の光景と同じアングルが今でも見られる。

吉田から御油まで旧街道にまつわるわびしい家々や松並木が所々ふと昔を感じさせては呉れるが、四六時トラックの往交う国道1号線の音に忽ち想いの夢は破られてしまう。小坂井は三河まんざいの発祥地。



御油 (36)

御油の家並み程広重の絵そのままを伝えている宿場は他に例を見ない。はたこの店頭の前板の間はみな簀床で、その上に桶を置き客のすすぎ湯に使ったという。道路側の前面だけ二階で、そこから腕木が出て垂木が長くなっており、軒やひさしも長く、千本格子がはまっているのが特色。若松屋、竹屋など江戸時代末期そのままの外観をとどめた旧はたご屋が数軒残っている。宿のはづれには東海道中最も旧態をとどめる天然記念物「御油の松並木」が約五百米残っている。この宿の東林寺の境内には投身自殺した五人の遊女の墓と大通寺の池が陰惨な物語りを今に残している。

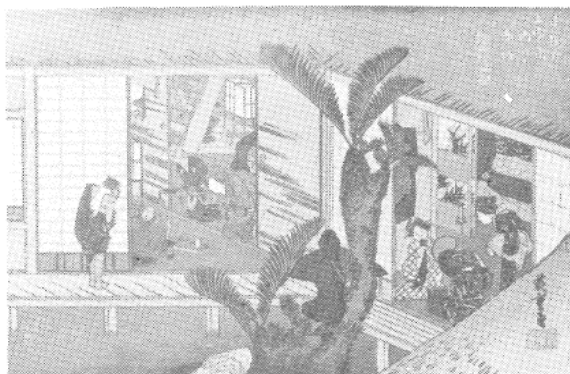


赤坂 (37)

松並木がきれるとすぐ赤坂の宿。「夏の月御油より出でて赤坂や」の芭蕉の句碑のある関川神社。広重赤坂の絵にあるソテツの木が今も残っている玉清山浄泉寺。外観は昔のままで二階にもそのままの遊女の部屋がある大橋屋（この外板に古い遊女の絵が浮出している）。その向側二村さん宅玄関にある馬つなぎの環。そして旧本陣の裏屋敷に住む平松家には、大小名の宿帳や古文書など何百点も保存されている。

赤坂の次間の宿の本宿にある浄土宗の法蔵寺には家康が幼稚の頃に手習をした机などがあり、

門前には家康お手植の「御曹子掛松」がそびえている。



藤川 (38)

広重描く藤川の棒鼻の図の棒鼻とは宿場のはづれのことで、高札場もあり、村役人が神馬のお通りに頭を下げている。この行列はおそらく広重自身が同行した八朔御馬献上の行列と思われる。天保三年のとき広重はその有様をスケッチするため行列と同行しはじめて京都へ上り、その結果がこの東海道五十三次の名作となったものである。

藤川に橘屋という脇本陣が中町に残っており今は岡崎市役所の藤川支所。その門は享保四年のもので江戸時代のまま。

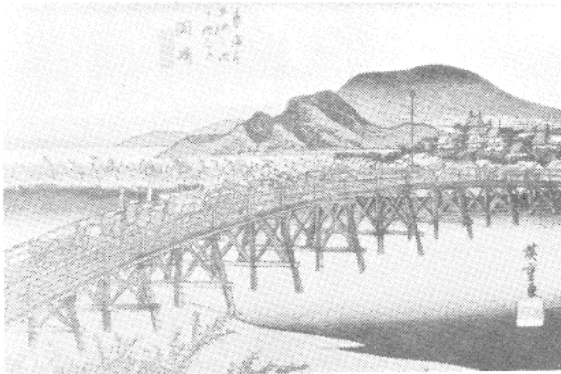
もと一里塚のあった一里山の十王堂と芭蕉塚には『爰も三河むらさき麦のかきつばた』と記した句碑があり、十王堂は赤穂四十七士の一人神崎与五郎にわび証文をかかせた馬喰の丑五郎が建立したと伝えられる。



岡崎 (39)

岡崎源氏螢の発祥地乙川近くで本多侯五萬石の城下町岡崎に入るとすぐ大平一里塚があり塚の上に榎が一本。岡崎の旧本陣は現郵便局。籠田公園内に移された道標がある。

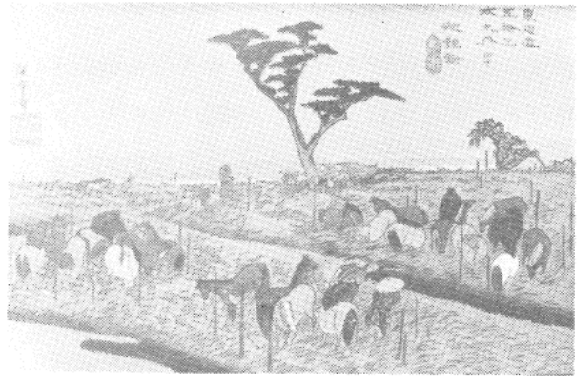
『五万石でも岡崎さまはお城下まで船がつく』の船着場は岡崎城の西下桜馬場あたりという。広重描くこの矢作橋は日吉丸と野武士蜂須賀小六の出会いで名高い。名物八丁味噌は岡崎城の西側、矢作橋との間にある。



池鯉鮒 (40)

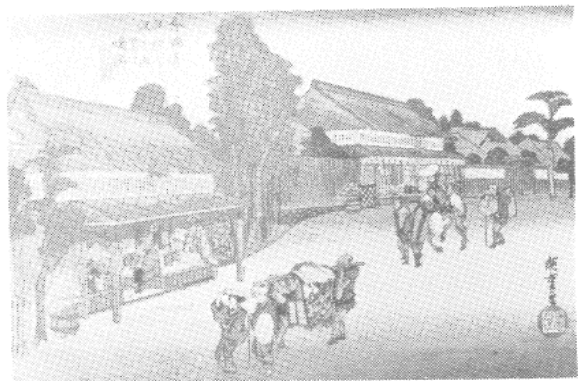
岡崎と知立の中間あたり来迎寺の立場から北へ少し入ると八橋のかきつばたで知られた無量寿寺がある。ここは仁寿元年、在原朝臣業平が東へ下る途中、この辺に美しく咲きほころぶ花をみて旅情をうたった『からころも、きつつ馴れにし妻しあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思う』は有名でかきつばたの五字を各句の上へすえたという。

池鯉鮒(今は知立)の慈眼寺の境内で毎年四月行われた馬市は江戸時代から有名で、広重も五十三次の知立を首夏馬市と題して描いている。今も境内に馬の碑があり昔をしのばせる松並木も残る。知立神社には『不断たつちりゆうの宿の木綿市』の芭蕉の碑があるように知立は昔は三河木綿の集散地として栄えた。



鳴海 (41)

名物しぼりの有松は鳴海より一里東にあり、細き木綿を風流に絞りて紅藍に染めて商うなり。この市店十余軒あり。と昔の街道記にある。役場の庭にある石碑の武田庄九郎武則という人が有松しぼりの始祖。庄九郎は名古屋城工事中にしぼりを着ているものを見て、しぼり技法のヒントを得たという。一方、鳴海しぼり商工組合では鳴海しぼりの方が先だといひ、どちらが本家かはむずかしい問題だが、広重も五十三次の鳴海については鳴海ならぬ「名物有松絞」と題印にある。広重描く昔ながらの外観をもつ絞り問屋の代表は井桁屋、竹田嘉兵衛、岡兼商店など。町役場隣の駐在所建物は江戸時代に有松きよりの絞問屋だつた丸正の店の一部だといひ。



宮 (42)

宮の宿に入る手前笠寺の立場に北側だけ大榎の茂る笠寺の一里塚がある。地名を俗に柚の木

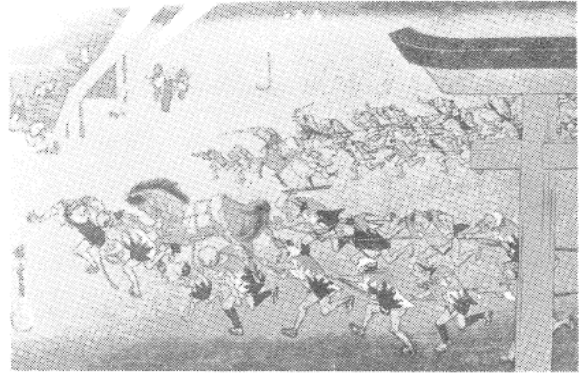
生産と技術

といっているのは榎の木の訛りであろう。その先が笠寺観音。聖武天皇のころ善光上人が開基自作の観音像を本尊とした。一時は荒れ果てたが、雨にうたれている本尊に鳴海の長者の侍女が自分の笠をかぶせていた所を藤原兼平に見染められ、後にその女性が寺を復興、笠覆寺というようになった。

宮は今の名古屋の熱田で伝馬町にある裁断橋の母性愛の物語り(略)、熱田署の前の四辻に寛政二年建立の道標あり。熱田の宮は草薙で先述の天叢雲の劔→草薙劔が御神体。ここの祭礼の一つ馬追いで神社の鳥井の前を、はでな絞染めの半纏を着た男たちに追われて必死に駆ける

馬を広重はダイナミックに描いている。

堀川に面して昔桑名ゆきの船の出た七里の渡し場跡があり今も熱田湊常夜灯が薄暮になるともつて遠い昔を偲ばせてくれる。



(次号につづく)